

坂田正治教授を送る

深堀建二郎

坂田正治先生は昭和44年3月に東京大学の大学院を終了された後、そのまま当熊本大学法文学部（当時）に着任され、この平成20年3月に至るまで実に39年間にわたって、文学科の独語独文学教室において教育と研究に従事してこられました。

坂田先生のご専門は近代ドイツ抒情詩の研究で、まずは古典主義とロマン主義の間に生きた抒情詩人ヘルダーリンの研究で学生生活を開始されましたが、その後ゲーテやシラーの出現する道を準備したと言われるクロプシュトックの研究に移られ、十余年のご研鑽の後に最初の著書『クロプシュトックの抒情詩研究』を上梓されました。門外漢の私などから見ましても、このご本は日本におけるクロプシュトックに関する極めて貴重なモノグラフィーたることは、疑うべくもありません。しかし、先生のご研究は止まる所を知らず、今度は韻文たると散文たるとを問わずドイツ文学の最高峰と世人みな認めるゲーテにその矛先が向けられることになり、ほぼ前著から10年後にゲーテの抒情詩を中心に論じた『ゲーテと異文化』が物されました。これは、「グローバルでボーダレスの時代に甦るゲーテのポエジー」とご本の帯に謳われているように、異文化に寛容で心の広いゲーテの像を呈示して、まさに現代にタイムリーな著作足りえています。

それから、坂田先生はその2年後の昨年、「熊本大学学術出版助成」を得て三冊目の御著書『バラードの競演—ゲーテ対シラー』を出版されました。ドイツ古典主義文学の二つの高峰が、バラードの競作を契機として形成されていった過程を論じたこのご本も、日本ではあまり論じられていない領野を切り開いたものだと愚考します。先生にはその他に、私家版文学論の『エロースへの招待』という洒落なエッセイ集と、詩論の翻訳があります。

先生は教育面においても、学生たちにドイツの詩を中心とした授業をなされ、特にある時期などは、先生のご指導のもとにドイツ・リートと抒情詩の

関係について修士論文を書く院生が4～5人続いたほどで、その懇切丁寧なご指導の恩恵に浴した学生も多いと思います。

さて、坂田先生は在任中に留学生センター長を2年、文学科長を3年歴任され、研究・教育の分野のみならず、管理行政の面でも申し分ない事務能力を発揮され、どこにそんな能力を隠されていたのかと思ったものでした。

私は先生と同じ教室の同僚として11年間ご一緒させて頂き、先生の日本酒好きの場面をよく拝見しましたが、どうかこれからもお好きな日本酒を大いに嗜まれ、末永くドイツ抒情詩の研究を続けていかれますよう祈念しております。